

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520423

研究課題名（和文） 日本語方言の終助詞の意味の類型に関する研究

研究課題名（英文） A Study for a framework of description of the meanings of sentence final particles in Japanese dialects

## 研究代表者

井上 優 (INOUE MASARU)

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：30213177

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、日本語方言の終助詞の意味を分析的に記述するための枠組みの構築を目標に次の2つのことをおこなった。(1)過去の方言終助詞に関する情報(終助詞の語形・意味記述, 地域, 例文, 出典, 標準語訳)を概観できるデータベース(方言終助詞研究総覧)の構築。(2)終助詞の意味に関する方言間の比較, 特に類似の意味を表す終助詞の比較。

## 研究成果の概要（英文）：

This study aims to establish a framework for analysis and description of the meanings of sentence final particles in Japanese dialects by (i) the compilation of a database which contains information about the previous studies of sentence final particles in Japanese dialects, and (ii) the comparison of the meanings of sentence final particles in the different dialects which express similar meanings.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：モダリティ, 終助詞, 文末詞, 日本語方言, 心的態度

## 1. 研究開始当初の背景

文法研究の成熟の度合いを示す指標の一つに、言語（方言）間の類似と相違の様相を記述するための枠組みや分析概念がどの程度整備されているかということがある。文法研究のいくつかの領域では、そのような枠組みや概念が見出されているが、方言終助詞の研究はそのようなレベルに達していない。そ

のため、研究者によって終助詞の意味のとらえ方や意味記述の方法が異なり、意味記述も具体性に欠けることが少なくない。方言終助詞の研究を次の段階に進めるためには、一般言語学的な観点から先行研究の成果を整理し、日本語方言の終助詞を分析的に記述する（体系的に調査する）一般的な枠組みを整備するとともに、方言間の比較を通じて、終助

詞の意味をより具体的な形でとらえることが必要である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「1. 研究開始当初の背景」に記載した状況をふまえ、日本語方言の終助詞の意味を分析的に記述するための枠組みを構築することである。具体的には、次の2つのことをおこなった。

- (1) 過去の方言終助詞研究に関する情報(終助詞の語形・意味記述, 地域, 例文, 出典, 標準語訳)を概観できるデータベース(方言終助詞研究総覧)の構築。
- (2) 終助詞の意味に関する方言間の比較。特に複数の方言間で類似した意味・用法を担っている終助詞の共通点・相違点の記述。

## 3. 研究の方法

①過去の方言終助詞研究に関する情報を概観できるデータベース(方言終助詞研究総覧)の構築については、次の情報をExcelファイルの形で整理する。

- (1) 論文タイトル, 著者
- (2) 地域
- (3) 分析対象とされた終助詞の語形
- (4) 当該語形の基本的意味に関する記述
- (5) 例文と出典
- (6) 標準語訳

②終助詞の意味に関する方言間の比較については、特に次のような終助詞をとりあげて、詳細な意味の比較をおこなう。

- (1) 同一の意味カテゴリー(例えば確認要求)の意味を表す終助詞
- (2) 類似の意味記述(例えば「既定事項」の叙述)がなされている終助詞

## 4. 研究成果

①過去の方言終助詞研究に関する情報を概観できるデータベース(方言終助詞研究総覧)については、研究期間中に研究代表者の所属先が変わり、研究環境(特に先行研究の収集環境)が変化したため、研究期間中に完成させることができなかつた。今後できるだけ早い時期に完成させ、ホームページ上で公開する予定である。

②方言の終助詞の意味を分析的に記述するための枠組みについては、次のような見通しを得ている。

(1) 終助詞には、(i) 特定の意味タイプの文をつくるもの(A類終助詞, 例: 疑問文をつくる「か」, 禁止文をつくる「な」など)と、(ii) タイプがすでに決まっている文に特定の意味を加える終助詞(B類終助詞, 例: 平叙文・疑問文・命令文(依頼文)につく「よ」「ね」など)がある。

(2) B類終助詞の中には、(i) さまざまな種類の文につきうる汎用性の高いものと、(ii) 特定のタイプの文にしかつかない汎用性の低いものがある。また、(i) 他の終助詞と組み合わせで使用可能なものと、(ii) もっぱら単独で使用されるものがある。汎用性の高さや他の終助詞との組み合わせが可能な度合いは、大筋において相関関係にある。

(3) 他の終助詞と「組み合わせ可」の終助詞と、もっぱら単独で使用される「組み合わせ不可」の終助詞の意味は、それぞれ次のような観点から方言間の比較をおこなうのが適切である。

a 「組み合わせ可」の終助詞の意味は、「話し手が判断をおこない、それを外部に出して評価を受ける」という判断の形成・処理の過程の中でとらえる。(終助詞の組み合わせはその過程の反映と考える。)

b 「組み合わせ不可」の終助詞は、方言ごとに一定の意味の傾向性や体系性が見られるかどうかを考える。

(2), (3)の観点から、例えば、標準語と富山県井波方言の終助詞を比較すると、次のことが言える。

第一に、標準語の場合は、他の終助詞との組み合わせが可能な終助詞は汎用性が高いことが多いが、井波方言の場合は、他の終助詞との組み合わせが可能であっても汎用性が低いことが多い。

第二に、「組み合わせ可」の終助詞、特に標準語の「よ」とそれに近い井波方言の終助詞(チャ, ワ)の意味を比較すると、前者は「『こう判断してよい』と話し手の判断を確定させる」という意味を表すのに対し、後者は「ワ(個人的見解)」、「チャ(既定事項)」のようにより具体的な話し手の判断様式を表す。

第三に、「組み合わせ不可」の終助詞を比較すると、井波方言の場合は「矛盾に対する思い惑い」を表す傾向にあるのに対し、標準語の場合は「認識の強化・弱化の宣言」を表す傾向にある。

③類似の意味記述がなされている終助詞の中には、(i) 中核的な意味を共有し、基本的に同じ枠組みの中でとらえられるものと、(ii) 中核的な意味が必ずしも同じでなく、異なる枠組みの中でとらえるのが適切と考えられるものがある。

(i)の例としては、確認要求を表す各地方言の「ガ」および関連表現があげられる。これらは、「当該情報を聞き手にも認識できるはずのこと、話し手に認識できていたはずのこととして提示する」という中核的な意味を共有し、方言間の用法の違いは、どの程度聞き手(話し手)の既成の認識の修正を要求す

るか（既有知識の参照要求程度か、既成知識の修正まで要求するか）という視点から整理できるとみられる。

(i)の例としては、「既定事項を表す」という線で意味の一般化がなされている富山方言「チャ」、山口方言「イネ」、博多方言「タイ」があげられる。これらの終助詞の用法を比較すると、使用可能な文タイプや「既定事項を表す」ということの具体的な内容がかなり異なることがわかる。富山方言の「チャ」が「既定事項を表す」というのは、「これ以上考えなくてよい」という「判断放棄」の姿勢である。一方、博多方言の「タイ」が「既定事項を表す」というのは、「当該の情報が話し手の外にある規範としての知識と合致する」という意味である。また、山口方言の「イネ」が「既定事項を表す」というのは、「共通知識であるはずのことがそうでなくなっている」という想定のもとで、共通知識の強制的な再構築指示をおこなうということである。このことは、「既定事項を表す」ということはどの方言においても重要な役割を果たし、それを実現するために様々な方法がとられているということを示唆している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 定延利之，ジェスチャーとしての感動詞と終助詞，日本語学，査読無，31巻3号，2012，40-51
- ② 渋谷勝己，山形市方言の文末詞ヤーヨと対比して一，阪大社会言語学研究ノート，査読無，10号，2012，78-88
- ③ 船木礼子，京都市方言の接続助詞・終助詞「シ」の用法，『論究日本文学』，査読無，96号，2012，11-28
- ④ 松丸真大，富山県における勧誘表現の伝播とその要因一人の移動との相関に注目して一，滋賀大文，査読無，49号，2012，1-15
- ⑤ 渋谷勝己，山形市方言における引用・伝聞形式テとド，阪大社会言語学研究ノート，査読無，第9号，2011，1-13
- ⑥ 船木礼子，カジュアルスタイルにおける方言切換え一形式の受容と切換えの要因一，神女大文，査読無，22号，2011，85-66
- ⑦ 井上優，話し手の気持ちを表す方言の文末表現，大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告，査読無，17号，2010，49-61
- ⑧ 定延利之，会話においてフィラーを発するという事，音声研究，査読有，14巻3号，2010，27-39

- ⑨ 松丸真大，方言話者のスタイル切換え，日本語学，査読無，29巻14号，2010，142-152
- ⑩ 松丸真大，確認要求表現からみた日本海沿岸地域の特徴，東アジア内海の環境と文化（日本海総合研究プロジェクト研究報告，査読無，5号，2010，66-89

[学会発表] (計 4 件)

- ① 井上優，話し手の気持ちを表す方言の文末表現，大阪樟蔭女子大学日本語研究センターシンポジウム，2009年7月25日，大阪樟蔭女子大学
- ② 定延利之，終助詞教育の内容と方法，日本語音声コミュニケーション教育研究会，2009，関西学院大学大阪梅田キャンパス
- ③ 船木礼子，カジュアルスタイルにおける方言切換え一移住先方言の受容と切換えの要因一，本方言研究会第88・89回研究発表会，2009，島根県立産業交流会館
- ④ 松丸真大，奄美大島瀬戸内町方言の否定形式アランの意味記述，第53回中部日本・日本語学研究会，2009，じゅうろくプラザ（岐阜市）

[その他]

ホームページ等 なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 優 (INOUE MASARU)  
麗澤大学・外国語学部・教授  
研究者番号：30213177

(2) 研究分担者

定延 利之 (SADANOBU TOSHIYUKI)  
神戸大学・国際文化学研究科・教授  
研究者番号：50235305

(3) 連携研究者

渋谷 勝己 (SHIBUYA KATSUMI)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：90206152

(4)

高木 千恵 (TAKAGI CHIE)  
大阪大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：50454591

(5)

坪内 佐智世 (TSUBOUCHI SACHIYO)  
福岡教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80315019

(6)

橋本 (船木) 礼子 (HASHIMOTO (FUNAKI))

REIKO)

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00454736

(7)

松丸 真大 (MATSUMARU MICHIO)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：30379218